

# 気づきからはじまる子ども理解



とき くにひこ／岐阜県生まれ。専門は発達心理学。全障研岐阜支部長。元岐阜大学。

土岐邦彦

第1回 原点に立ち返ることから

わが子となんか通じ合えたなとか、受けもつ子どもにちょっと近づけたかなと感じたときってありませんか。それは、「あっ、こういうことだったのか」と気づいたときに感じるのであります。そうした「気づき」を感じる以前は、子どもをとらえる大人の眼と頭が固くなっていたのかもしれません。でも、その「気づき」を感じたときの人の眼と頭は柔らかいはず。固くもなれば柔らかくなる、そんなかかわる人の視点から、子どもの発達をとらえなおしてみたいと思います。

## ◇発達保障思想の原点に立ち返る

連載の第1回は、発達保障思想の原点に立ち返ることから始めます。そして、その源流は、戦後まもない1946年に「近江学園」（戦災孤児および知的障害のある子どもたち等の複合児童施設）、さらに重症心身障害児施設「びわこ学園」（1963年）「第二びわこ学園」（1966年）の創設と運営に尽くした糸賀一雄の思想とそれらの施設で展開された実践のなかにみることができます。

糸賀は述べます。

ちよつと見れば生ける屍のようだとも

おそらく重症心身障害のある子どもたちの「生きる価値」も「生きる権利」も厳しくい人（自分自身も含めて）や社会を批判します。そして、「この子らを世に生きる意欲」「個性的な自己実現」「人格発達の権利」など、私たちが大切にしている発達をとらえるキーワードが散りばめられています。さらに、現在この国の政治的権力を握る者たちが経済効率という視点でのみ唱える「人間の生産性」に対し、「権利としての発達」論のなかに「生産」という言葉の真の意味を位置づけるべくその基本的な視点もここには掲げられています。

私が「この子らを世の光に」といったのは、世の光として自前で生きている姿、太陽や星のように自分自身で光っている、ということです。重症の子どもたちは自分では光れないと考えられていたのですが、実は自分で光っていました。おしめを取り替えられている一人の重症の青年が、ある日、力んで、力んで、一生懸命腰を持ちあげていました。その力が電気のように手に伝わって保母はハツとしました。（中略）伝わってくるその響きに生命というものを感じさせられたのです。その喜びと驚き。これこそが自己表現、自己実現の姿なのです。（糸

賀一雄著作集Ⅲ』日本放送出版協会、1983年）

すでに50年以上前の文章のなかに、「生きる意欲」「個性的な自己実現」「人格発達の権利」など、私たちが大切にしている発達をとらえるキーワードが散りばめられています。さらに、現在この国の政治的権力を握る者たちが経済効率という視点でのみ唱える「人間の生産性」に対し、「権利としての発達」論のなかに「生産」という言葉の真の意味を位置づけるべくその基本的な視点もここには掲げられています。

## ◇知性と感情と身体

ここでは、紹介した文章のなかにある保母（保育士）さんと重度障害のある青年とのかかわりについて注目したいと思います。おしめを取り替えることは保母さんの仕事です。労働者には自分が責任をもつ仕事をしっかりと果たすことが求められます。そこには「仕事を不可なくこなす」という侧面があることを私たちも自らの労働において日常的に経験していることでしょう。おそらくこの保母さんにおいても「こなす」日々であったかも

では、なぜこの保母さんは「ハッとした」のでしょうか。もともと対象となる人をとらえる柔軟かつ鋭い視点の持ち主だったのでしょうか。しかし、それ以上に、「一生懸命腰を持ちあげようとした」その青年のふるまいに、私たちは多くを学ぶ必要があるのではないでしょうか。自分の身体を自在に動かすことが困難な青年にとって、その身体に常に心地よいを感じさせてくれる保母さんは格別の存在だったのでしょう。紹介した文章だけでは青年の知的（他者認識）レベルは特定できませんが、知的能力だけが青年をその気にさせたわけではないでしょう。知的なもの（知性）と心地よさという感覚（情動・感情）が結びつき、それがかかわりを継続してくれる人に対する想いとなって身体ごと表現する姿。そこに保母さん自身の知性と感情と身体が反応した（気づきをもたらした）のではないかでしょうか。

本連載の前半は、私が出会った子どもたちを事例的に紹介します。そして後半は、「集団と個人の関係」という問題に軸足を移し、年間を通じて「気づきからはじまる子ども理解」というテーマへの接